

1 開催趣旨

県内の社会資本整備における協働の取組を推進し、協働・協創によるまちづくりについて考えるため、シンポジウムを開催し、人と人が出会い、地域と地域を結ぶ「道」をテーマに、基調講演や実践事例の紹介を行うとともに、まちづくりに取り組む方々との交流を図る。

2 プログラム

13:00 開会

あいさつ（県土整備部 永納栄一次長）

13:10～ 第1部 基調講演

『限界集落からの脱却！妻籠の住民主体の集落づくり』

講師：藤原 義則氏（公益財団法人妻籠を愛する会 常務理事）

14:00～ 第2部 活動紹介&交流会

《協働によるまちづくり活動の紹介》14:00～15:10

①伊勢本街道と県道嬉野美杉線を活かしたまちづくり

結城 實氏

（津市美杉町 伊勢本街道を活かした地域づくり協議会会長）

②県道整備による横輪・矢持の安全安心のまちづくり

中西 利和氏（伊勢市横輪町町内会区長）

③きらり三橋 志摩ゆうやけパール街道でのおもてなし活動

竹内 正博氏（志摩市志摩町 道ちゃん塾会長）

《交流会》15:10～16:40（途中休憩 15:15～15:25）

上記①～③の3団体及び景観まちづくりプロジェクト事業実施団体（下記3団体）の6班に分かれ、交流及び意見交換を実施。

・熊野古道 女鬼峠保存会（発表者：森田篤会長）

・地縁法人 美旗まちづくり協議会（発表者：白岩昌紀副会長）

・三木里地区グリーンツーリズム推進会議（発表者：平山泉氏）

さらに5～6人のグループに分かれ、「協働」の良い点や不安点等について討議を行った後、会場全体でディスカッション。

【コーディネーター】

加藤 武志氏（まち楽房有限会社 代表取締役）

【コメンテーター】

藤原 義則氏（(公財)妻籠を愛する会 常務理事）

浅野 聡氏（三重大学大学院工学研究科 准教授）

3 シンポジウムの内容

(1) 基調講演

公益財団法人妻籠を愛する会 藤原 義則常務理事から、「限界集落からの脱却！妻籠の住民主体の集落づくり」と題してお話をいただきました。



- ・長野県南木曾町の妻籠宿は、昭和 40 年頃、限界集落にならんとしていたが、町の職員であった小林俊彦（現：妻籠を愛する会理事長）が町長からの特命を受け、妻籠宿の集落保存という名の観光開発を行った。
- ・行政、技術者・学校の先生たち、住民がそれぞれ三位一体で協力し合って妻籠宿を保存・活用していくため、全住民による組織として「妻籠を愛する会」を発足させた。その後、住民の総意によって日本初となる住民憲章「妻籠宿を守る住民憲章」を制定した。「売らない」「貸さない」「こわさない」の三原則を実践しつつ、外部資本から妻籠を守り、駐車場運営により自主財源を確保しながら「保存」を優先した活動を行っている。
- ・防火態勢の整備や、安全・安心対策を講じ、道普請・水普請等の会の活動はボランティアで、共同作業として行っている。また、伝統的な板葺・石置き屋根の葺き替えなどの技能の習得や継承を行い、花木の植栽や手入れ、外来植物の駆除などの景観づくり活動を行っている。さらに、文化文政風俗絵巻之行列をはじめとする様々な行事・イベントも長年継続している。
- ・「自分達にとって大事なものは、文化財を今の時代で食べてしまうのではなく、後世に伝えることで、限界集落から脱却した果実を次の世代の人達に受け継ぐべきだ」というのが前提にある。協働作業で地域おこしをしながら後世に伝えることをしている。苦勞を惜しまず、一生懸命やっていたら次の世代も同じように親の背中を見て、ついてきてくれる。

(2) 活動紹介

県内において、協働によるまちづくりを実践されている方々から活動を紹介していただきました。



①伊勢本街道と県道嬉野美杉線を活かしたまちづくり

結城 實氏（津市美杉町 伊勢本街道を活かした地域づくり協議会会長）

「伊勢本街道を活かした地域づくり協議会」は、伊勢本街道が通る津市美杉町の伊勢地、八幡、多気の3地区の地域住民で平成20年に組織された団体で、県と協働で県道の修景整備に取り組んだほか、ウォークイベントの開催や、屋号看板の設置、案内マップの作成に取り組んでいる。

②県道整備による横輪・矢持の安全安心のまちづくり

中西 利和氏（伊勢市横輪町町内会区長） 伊勢市横輪町では、「横輪桜」「ほたる」「横輪いも」など地域資源を活かした地域の活性化に取り組んでいる。平成19年から、横輪町町内会と矢持町自治会が、県道横輪南勢線の道路改良に関して県と協働し、安全・安心のまちづくりの実現に向け、取り組みを進めている。

③きらり三橋 志摩ゆうやけパール街道でのおもてなし活動

竹内 正博氏（志摩市志摩町 道ちゃん塾会長）

国道260号沿線景観形成の検討のため、平成15年に「道ちゃん塾」を設立。「道ちゃん塾」は、県と協働で志摩大橋の整備におけるレリーフデザインの検討や長田橋の塗装塗替え工事における色の選定をするほか、様々なイベントの開催や国道沿線の美化活動などに取り組んでいる。

(3) 交流会

まち楽房有限会社 加藤 武志代表取締役によるコーディネートのもと、全参加者が上記活動紹介①～③の3団体及び景観まちづくりプロジェクト事業実施団体(下記④～⑥の3団体)の6班に分かれ、交流及び意見交換を実施しました。

④熊野古道 女鬼峠保存会（発表者：森田篤会長）

⑤地縁法人 美旗まちづくり協議会

（発表者：白岩昌紀副会長）

⑥三木里地区グリーンツーリズム推進会議

（発表者：平山泉氏）



その後、5～6人ずつのグループ（15グループ）に分かれ、「協働の良い点、期待する点」及び「協働の不安点、疑問点」について付箋に書き出し、討議を行った後、会場全体で共有を行いました。



（参加者が付箋に書かれた主なご意見）

良い点、期待する点

- ・みんなですれば楽しさ倍増、ともに楽しんで事が早く進む、仲間ができる
- ・自分達だけではできないことが力を合わせることによってできるようになる
- ・人手不足の解消等が期待できる、自分の地域の良さを見直すことができる
- ・たくさんの人が関わることでいろんな意見やアイデアがでる
- ・異種異世代間の交流が進むことでお互いの世界が広がる
- ・人づくりや地域づくりにつながる
- ・協働は必要ですが、本当の意味での協働を考えましょう

不安点、疑問点

- ・若い力が欲しい、後継者問題、継続していけるのか不安
- ・行政との関係…縦割りの行政、考えが固い、行政のスタンスがわかりづらい
- ・資金の問題…ボランティアで一生懸命やっているが気持ちだけで続くのか、ボランティアにも限界がある、資金・財源の問題が出てくるのでは
- ・たくさんの人が関わることで意思決定の仕方が難しくなるのでは
- ・みんなに意見を聴いてしまうと大変なのでは
- ・無理な要望をされることがある、やらされ感がある
- ・必ずしも協働になじまないこともあるのでは

さらに、会場内にマイクを回し、参加者からのご意見をいただきました。

- ・名張の話を聞いたがすばらしかった。街道まちづくり会の活動をしているが70代が多い。若い世代が必要。
- ・大学で勉強中。様々な意見を生かせるよう行政に就職したい。地域資源をどのように生かしていくかが地域の活性化に必要だと知った。
- ・道ちゃん塾の長い地道な活動、女性が多い男女構成、30代から70代まで年齢層が広いのが良い。
- ・私が活動する地区も60~70代がほとんど。この先行事が続けていけるか心配。継続していくためには無理してやらない。自分達が心から楽しいと思える活動を継続していくことで、同世代が参加してもらえるのではないかと考えて活動している。

コメンテーターから次のコメントをいただきました。

- ・公益財団法人妻籠を愛する会 藤原義則常務理事
自分達の地域で地域づくりをするための格言がある。
①大を小は兼ねない（地域づくりや人づくりでは大きいことが良いことではない）。
②多数決で決めない。（必ず相反する意見があるのでまとまらない。）
③議論してもケンカせず。
④反対してもいいが他人の足を引っ張るな。

以上は大事なことだと思う。皆さんも、賛成する所は大いに賛成し、協働なので、できる時に参加し、無理をしない。

- ・三重大学大学院工学研究科 浅野聡准教授
今日はたくさんのご意見を改めて学んだ。
活動の継続性、活動の自立性（自主財源を確保できるしくみが必要）、住民主体、地場が持っている魅力を



フルに活用し、身の丈にあった地域づくりの大切さ。

三重大学では、三重県と連携しながら防災まちづくりに力を入れている。南海トラフの巨大地震がおきたら三重県全体が大混乱になる。いかにパニックを軽減し一日も早く落ち着きを取り戻すかが課題。岩手県の震災復興調査でも、震災前から住民主体で話し合いをして、行政と良い関係を作ってまちづくりを行っている地域は、やっていない地域よりはるかに意見の集約が早く、まちづくりの合意形成ができて事業化ができるという話をたくさん聞いた。まちづくりに前向きに参加される今日お集まりの皆様のような県民の方を多く育てていくことが防災のまちづくりにおいても重要と感じた。

最後に、加藤武志コーディネーターに本日の交流会のまとめをしていただきました。

①「み」んな（ここにいない人達）を巻き込む。

小さな単位に分節をして、観客・聴衆から当事者になってもらう手法である「当事者化」を図ることが大事。皆さんは参加のスイッチを押す係、火つけ役。



②小（「ち」い）さなこと、楽しいこと。

人は正しいことだから動くのではない。

プラスになること（お金をいただくことだけでなく、仲間ができる喜び、自分のしたことが人の役立つ喜び）だから動く。プラスの連鎖を生むような小さなこと、楽しいことを無理なく続けることが、みんなを巻き込みつなげていくヒントになる。

③「創」造的なプロセスは人と人の対話から。

0だったものからプラス1になる瞬間は、結局、今日のように人と人が顔をつき合わせて話すことから。さらに、書くことで「見える化」し、共有できる。

- ・そもそも協働は目的ではない、手段である。協働にふさわしいことばかりではない。協働が目的になるとやらされ感がでて、行政が協働するための材料を用意するなど本末転倒となる。
- ・よりよいまちにしたり、より良いサービスを生むため、協働でやった方がうまくいくというものだけを協働すればいい。協働ってついていければ良いことだとかやみくもに信じるのではなく、協働の先にあるもの、本当の協働を考えることが大切である。
- ・お気づきの方いらっしゃいますか？①②③の頭文字を取ると、「みち創」＝「みちづくり」となります。おあとがよろしいようで。